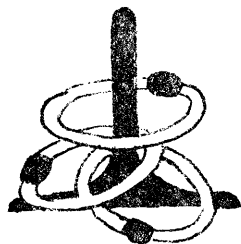


エリクソンと幼児教育 (4)



仁科 弥生

二、筋肉と肛門期 (その二)

前回に引きつづき自律性の発達について、さらに情緒的、知的発達の側面から考えてみよう。

自律の感覚の獲得がさまざまな技能の習得と対になって進むことはすでに指摘したが、この時期の子どもの技能学習の手段は主に模倣である。子どもにとって重要な意味をもつ人物、たとえば親や兄弟たちがそのモデルとなる。子どもは彼らがすることを何でも自分でやってみようとする。こうして、ある技能をうまく模倣するうちに次第にそれを自分のものとし、やがてそれをいろいろな目的のために自律的に使うようになる。すなわち、はじめは模倣によって獲得された広範な技能は、子どもの意志の働きによって、その子なりの方法で用いられるようになるのである。またこのような技能が徐々に子ども自身の興味にしたがって取捨選択されて、子どもの個性が色濃くなっていくのである。

ところで、自律性の発達の過程において、子どもの表出する怒りが非常にはげしいことはよく知られている事実である。この時期の子どもは自分の欲求が即座に満たされることを強く望む。それだけにすぐにそれが満たされないと強い欲求不満におちいり、

はげしい怒りを示すのである。それに加えて、未熟さから課題が思うように遂行できない、行動に親から制限が加えられる、兄弟や友達と争うなどといったことが欲求不満を一層増幅させる。子どもの新しいことへの挑戦を積極的に励まして自律感の獲得をうながし、子どもの欲求の表現に対してきわめて寛容であるタイプの親でさえ、子どもがぶっつけてくる怒りを平静に受け止めることはむづかしいほど、それは強烈である。もとより、情緒はわれわれ人間が本来もっているものである。われわれは喜び、悲しみ、怒り、恐れる。しかしこの情緒に関するギノットの次のような指摘は大変示唆に富んでいると思われる。

すなわち、われわれをおそうこれらの激情をわれわれは選ぶことはできないが、それらをどのように表現するかは選ぶことができるというのである。だから怒りの感情についてもわれわれは適切な形で表出することを学ばねばならないのであり、親はそれらの感情の表出にあたって、子どもに自分自身をコントロールし、より適切な方向へそれを切りかえることを教えなければならぬのである。そのためには、親は子どもの怒りを否定するのではなく、むしろその感情の存在を認め、それを理解していることを子どもに伝えることがまず必要となる。そうすることが子どもの心にゆとりを与え、子どもが自分の激情に対処することを容易にす

るからである。また、その場合、親自身がモデルとしての役割を演じていることも忘れてはならない。子どもは親の怒っている様子を見て、怒りの表出についても多くのことを学んでいるのである。だから両親が子どもに対して反応する通りに、子どもは彼らに怒りを表出しただけであるのに、もし怒ることはよくないことだといってきびしい罰をうけたとしよう。その場合に子どもが経験する混乱や不信の念ははかりしれないほど深刻であるにちがいない。

しかしながら、この時期を通して、子どもは自分の衝動を押えたり、或は切りかえる能力を高めていく。また自分の衝動の満足が遅らされても、それに耐える能力も身につけてくる。その理由は、一つは、知能発達にともない時間感覚を身につけはじめ、未来についてある程度認識することができるようになるからである。今ただちに欲しいものを手に入れることができなくても、少し後になればそれが手に入るということを理解できるようになる。勿論、満足を遅らせることを子どもに納得させる両親の側の努力も大切な役割を果たしている。こうして、待つこと、がまんすることができるようになると、子どものはげしい情緒的動揺も少なくなっていく。二つめの理由は、情緒を処理するのに役立つ言葉と想像力が発達してくるからである。もとより言葉は、子

どもにとっては自分の経験をまとめたり、内的状態を他者に伝えるための新しい道具である。自分の欲求を表現する言葉が増えれば増えるほど、その欲求が叶えられる可能性も増大する。たとえ自分の欲求が満足されない場合でも、自分がどのように感じているかを言葉を用いて他者に伝えることができる。実は、この言語化の過程を通して情緒の客観化が可能となり、子どもは自分自身の姿をちょうど鏡に映すように、自分の情緒や欲求に洞察を得て、自分の力でそれを適切にコントロールすることができるようになっていくのである。自律感の獲得という問題を考えるとき、われわれはこの言葉の果たす大きな役割を見のがしてはならない。またその意味で、その場合に果たす親の役割はその鏡になることであるという先のギノットの指摘は注目し値すると思われる。すなわち、親は子どもの感情を受け止めて、その感情が何であるかを言葉で明確に置き換えてやることによって、子どもの感情をまげずに、ありのままに映し出す鏡になることができるというのである。

勿論、言葉によって自分の動作や行動を十分に統制できるようになるのは少し後のことである。たとえばルリアの実験などで示されているように、四歳半か五歳になつてはじめて、言葉はその意味によって子どもの行動をコントロールするようになる。エリ

クソン自身は、言葉のこのような機能については、はっきりと言及してはいないが、その症例の一つ、三歳のサムの場合に、その経過が明快に示されていると思う。すなわち、サムは祖母の死をめぐっていくつかの不幸な体験をして以来、死の観念が心的刺激となつてなんか発作を起こしていたが、五歳になる頃には自分の欲求について自己観察ができるようになり、それまで彼のはげしい怒りを向けがちであった母親その人に、その自己観察を言葉で伝えることを学び、さらに母親を会話の中で彼の洞察の協力者とすることは学んで、やがてその発作を克服している。

また、衝動や情緒の統御がむづかしい場合に、子どもはしばしば空想によって、現実の能力ではコントロールできない状況をコントロールするようになる。すなわち、表象能力の発達にともない、自分が悩んでいる問題を表現したり、或は自分なりにそれを解決したりすることができる想像上の場面を遊びの中で作ることができるようになる。そしてこの想像の世界ではげしい感情が表出され、そして静められる。或は想像遊びの中で、子どもは受動的な体験を能動的な経験に置き換え、罰したり、許したり、恐れを克服したりする。こうして、情緒的に欲求に支配されやすい子どもは、遊びの中でだんだんとそれを支配することを学んでいくのである。

以上の考察は、われわれに大切なことを教えてくれる。すなわち、自律性と、それに関連して発達する意志力の根は、子どもの情緒的発達をうながす両親の努力と、子どもの知的発達との相互作用の中で育つということである。また、幼児は行動的に把握したことをイメージとして内在化させ、それをよりどころとして思考を展開しはじめる段階にある。前回でもふれた、頑張る、がんばる、自制する、といった意志力や、思いやる、ゆずるといった善意をこの時期に育てることは、実は子どもの内在するイメージを豊かにすることにつながる。したがって、それはとりもなおさず、この段階にふさわしい知的教育でもあるわけである。

次に、この発達段階における課題の達成や解決に失敗することから生じる問題や障害について、エリクソンはどのような見解をもっているのだろうか。

古典的精神分析理論では、この二、三歳の時期に、大人にみられる強迫的性格や神経症の源泉があると考えられている。強迫観念とは不安と結びつく事柄をしつこく繰り返しかることである。強迫行為とは繰り返し行なわれる儀式のことで、それは強迫観念と同じように個人を不合理のとりこにする。このような強迫的行動を動機づける不安の源泉は、身体の肛門部位や排泄のコントロールに関連して起こる子どもの無意識の葛藤にあるというの

である。正常の人間の場合には、強迫観念や強迫行為はその個人の統御の支配下にあることが多く、それは通常、秩序や清潔、計画などに対する関心となって現われる。ところが神経症の場合には、強迫的考えや行動傾向が個人の統御の限界を越えてしまっために、それらはその個人にとって有益な関心としての機能を失ってしまふのである。

エリクソンによれば、この段階において子どもが経験する基本的葛藤が招来する結果は、最終的には敵意にみちた期待や態度か、もしくは温和な気持をもった期待や態度かであるという。たとえば「保持する」ことは破壊的で残忍な保持や拘束にもなりうるし、「手に入れて大事にする」というような世話をする行動様式にもなりうる。「手放す」ことも、破壊的な力で、敵意をこめて放り出すことにもなれば、くつろいで「明け渡し」たり、「あるがままをみとめる」ということにもなる。この場合に子どもがおちいりやすい危険は、自由な選択と意志とで行動を統御する自律性を適切に導かれて獲得するという経験が許されなかったり、最初期の段階での信頼感の喪失が原因で自律の感覚を確かなものにする機会が少なかったりすると、感じやすい子どもは、ものごとを識別したり操作したりする衝動のすべてを自分自身に向けてしまうことである。そして、自分を「過度に調整」しようとした

り、「ませた良心」を発達させたりする。また何度も同じことを繰り返すことでものごとを吟味しようとして、自分自身の反復性に強迫的に取りつかれてしまう。しかしながら、実は両親と自分との間に相互調整が見いだせない領域では、子どもはこのような幼児的な強迫性や特定の儀式に固執することによって両親を支配する力を獲得しているのである。この子どものむなししい勝利を、たとえば『幼児期と社会』の中であげられていた、肛門期の保持と排出の問題にとらわれて身動きができなくなったアンとピーターの事例にみる事ができる。

後には腸や他の両面価値をもつ諸機能を自由な意志と選択とで徐々に統御しようとする試みに失敗して、発達の前段階の幼稚な行動に退行し、自分にとって大切な異性の親に対する愛情の処理という次の段階の課題へ進むことができないでいた。しかし、アンの場合の執拗な夜中の粗相と、ピーターの場合の深刻な便秘といういづれも当人にとってはきわめて不快な事態の中で、彼らは憎しみを感じる人々たちを追放し、愛している者たちを抱えこもうとする空想に耽っていたのである。そして同時に、これらの行為の結果は、彼らを支配しようとする親たちに対する彼らのサディスト的勝利を意味していたのである。このような場合に、子どもは頑固な抵抗ぶりに対して母親たちが腹を立てて応じることは、

事態を一層悪化させるだけであると、エリクソンは親たちを戒めている。なぜなら、この子どもたちは、その心の奥底では両親を愛していたし、また愛されたいと欲しているからである。またいまましい失敗を演じてこのような勝利をうるよりも、達成の喜びの方をはるかに望んでいたからである。われわれはその症状にとらわれて子どもの真の要求を誤解してはならない。そしてこのような症例の治療において分析医の果たす役割は、若い患者とその両親との間の失われた相互調節をもう一度確立させることであるという。そうなれば、子どもと親の双方に自己抑制が回復し、お互いがそれぞれに一方的に相手を支配しようとする、むなししい、しかも苦痛の多い努力を繰り返す必要がなくなるからである。

さて、このような肛門期の葛藤が大人の性格に影を落とすようになることは、たとえば先にあげた強迫性格という形で観察される。エリクソンは、これに加えて、ものごとを「うまくやりとげたい」という願望が強いにもかかわらず、何ごともうまく達成できないでいるという性格をあげている。そのような人々は、他人を回避し、強迫的に過剰服従的である。ませた良心が彼らにどんなこともやりとげさせないで、いつも恥じ入らせ、弁解させ見られるのを恐れながら人生を送らせるのである。そうでない場合

は、彼らは本ものの自律性は少しも身につけていないにもかかわらず、おのれの劣等感に対抗するために「過剰補償」と呼ばれるやり方で、反抗的な形の自律性をよそおうようになるという。反抗的な若者の集団、暴走族などはその一例であると思われる。

しかしながら、エリクソンは、本ものの自律性を発達させるためにわれわれは何をすべきかについて、断定的に世の親たちに告げることではできないと述べている。なぜならば、それは人間の価値にかかわる問題であり、したがってどう扱うべきかはきわめて微妙な問題だからである。精神分析は、罪悪感の過剰な増大や、それがもたらす自己の身体部位との過剰な疎隔感について研究をつづけてきた。そして子どもに対して大人が犯してはならないことは何であるかを公式化しようとしてきた。しかし厳密にいつて、どの年齢の、どんな種類の子どもに対して、してはならないことは何であるかをようやく理解しはじめたにすぎないと、彼はきわめて慎重である。そして次のように述べている。

「世界中のどの文化を例にとってみても、人々は自分たちのいう正しい人間の育成には、子どもの生活の中に恥や疑惑や、罪、恐れなどの感覚を首尾一貫して導入しなければならないと確信しているように見える。しかし、それらを具体的に実行するパターンはそれぞれ異なっている。それは、各文化の価値観がそれぞれ異

なるからである。たとえば、われわれはあまり早く離乳をしないようにとか、あまり早くから排泄のしつけをしないようになどという。しかし早すぎるとか遅すぎるとかいう場合の根拠は、われわれが回避したいと願う病理によるだけでなく、われわれが作り出した価値にもよるし、もっと率直に言えば、われわれがそれに従って生きて行こうとする価値観にも左右されているのである。そして子どもたちは、大人が何によって生きていくかきわめて早い時期に敏感に感じてしまうし、何がわれわれを愛させ、協力させ、確固たる存在たらしめているか、そしてまた何がわれわれを憎ませ、不安にさせ、われわれの中に分裂を起こさせているのかもさとしてしまうのである。」

勿論、彼がよって立つ発達理論からみて、明らかに回避することが必要と考えられる事柄は存在する。たとえば生後八ヶ月の後には、子どもは親からの「分離」について、それ以前よりも意識するようになる。この事実が実は眼前に迫っている自律の感覚を準備させるのである。しかしそれと同時に、この時期に経験する突然の母親との分離は、感じやすい子どもには見捨てられたという苦痛として体験され、激しい不安や引きこもりの原因となる。しかも通常は第二年目のはじめの三ヶ月ぐらいの間に、子どもは自律性を自覚しはじめる。そこで、この時期に排泄のしつけ

を始めることは、子どもの精一杯の力と意志による抵抗を引き起こすことになる。なぜなら、それは芽生えかかった自分の意志が「つぶされてしまう」ように感じられるからである。だからエリクソンは、この体験を回避させることの方が、「この時期にこそ排泄のしつけをしなければならぬ」と主張するよりも重要であると考えている。なぜなら、自律性が頑固に主張される時期もあるれば、安定した自律性を部分的に犠牲にしなければならぬ、時期もあるが、そのような犠牲が本当に意味をもつ時期というのは、子どもが自律性の中核を獲得し、そしてそれを強化し、同時により一層の洞察を獲得した後であるのは明らかだからである。したがって、しつけの方法は、好むと好まざるとにかかわらず文化的価値によって評価されるが、同時に、子どもの発達に即しても評価されなければならないのである。

また、エリクソンの分析によると、両親が幼い子どもたちに与えることのできる自律の感覚の種類と程度とは、両親自身が私たちの生活から引き出すことのできる威厳と人間的自立の感覚によって左右されるという。つまり、信頼の感覚が両親のたくましい現実的な信念の反映であるのと同じように、自律の感覚は両親の個としての自立的存在の尊厳の反映である。そして子どもの自律の感覚は、両親の側の正当な権威と合法的な独立の感覚に裏打

ちされた養育態度によって培われるのである。また、幼児期に養われたこの種の自律性が、将来においてもそれが挫折させられることはないという確信に満ちた期待を子どもに与えることができるといふ。しかし、そのためには、社会的に位置づけられた階層秩序の中で親の個としての基本的な権威が確信できるように父親と母親、親と雇用主、親と政府などの関係が必要である。なぜなら、子どもの心に引き起こされる恥や疑惑や、侮辱や不確かさの多くが、実は結婚生活や職業や市民生活における親自身の失意の結果と深くつながっているからである。そこで、子どもの自律の感覚は、高度の自律性と自主性とをそなえた経済、政治生活の維持によって支持されなければならないが、したがって、これは単に子どもだけの問題ではなく、大人の、そして社会の重要な問題でもあるのである。

さらに注目したいことは、現代人の抱く不安の根源についてエリクソンが示した鋭い指摘である。われわれは、もともと自身の「自律性」を保証するための手段として「法と秩序」の原則を生み、社会機構を発達させてきた。それらは各自の特権とその限界、義務と権利を規定する。勿論、自律しつづけ、自己決定しつづけるという一定の権利をも規定する。しかしながら、近ごろ目立っている現象は、すべての機構や組織が東西を問わず巨大化

し、機械化して、その下に人間が従属することが求められ、その非人間的で独裁的な力による支配が強まっていることである。幼児童年期に高度の個人的な自律性や誇りや出世を人生から期待できると教えられて育った子どもが、やがて大人となり、この複雑で、理解しがたい、超人間的な組織や機械によって自分が支配されていることに気づくとき、深刻な慢性の失意と無力感にとらわれるのである。この現実を、エリクソンはアメリカの若者たちの間に見た。わが国でも最近よく問題視される若者たちの無力感と大勢順応志向の傾向もこれと軌を一にする現象であると思われる。エリクソンはまた、そのような現代社会の機構の複雑さの中でさまざまな形の管理化がすすみ、その下で高まる個人の自律性を失うのではないかとという恐怖、自律的な自発性に制限を加えられ押えつけられるのではないかとという恐怖が、大規模な集団的不安となって表出されることの潜在的危険性について警告している。まさにエリクソンは、その深い洞察のもとに現代人の抱く不安の根源にせまり、すでに三十余年も前に、今日、世界の各地でみられる人間復権の運動を予見していたのである。

(津田塾大学)

参考文献追加

Ginott, H.G., *Between Parent and Child*. New York: Macmillan Company, 1965

